豆と豆殻の対話

「週末寸言」原稿　060902

山陽自動車道を西に向って兵庫県姫路市を過ぎた辺りに書写山という名のトンネルがある。このトンネルの上には書写山圓教寺という天台宗の古刹がある。

その昔、この寺には性空上人（910～1007）という名の高僧がいた。上人は法華経を完全にマスターしたために、眼耳鼻舌身意にかかる感覚、すなわち視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚及び知覚の六根を常に清浄に保つことができるようになったという。

あるとき、性空上人は旅に出た。一軒の貧しい小家に泊めてもらったところ、そこの家ではちょうど豆を煮ていた。見れば囲炉裏の燃料は、今鍋の中で煮られている当の豆の豆殻だった。

鍋の中の豆のぐつぐつ煮え立つ音を聞いていると、上人の耳には豆が、「疎からぬ己れらしも、恨めしく、我をば煮て、辛き目を見するものかな（身内である豆殻のお前たちが、何の恨みあってのことか知らないが、私を煮て、熱く辛い思いをさせることだなぁ）」と言っているように聞こえたのである。

これに対して燃えている豆殻も「我が心よりすることかは。焼かるゝはいかばかり堪へ難けれども、力なき事なり。かくな恨み給ひそ（わしらが本心からお前らを煮るものか。こうして火に焼かれる俺たちだって堪え難いのだが、どうしようもないんだ。そう恨まないでおくれよ）」と言っているように聞こえたというのである。なんと優しいお上人であろうか。（『徒然草』第69段）

性空上人と同じように、人間の言葉以外の音を聞き分ける能力を持った人は古来沢山いた。古代イスラエル第三代目の王ソロモンは知恵の指輪をはめることによって動物や植物など全ての生あるものと会話ができたというし、アッシジの聖フランチェスコは鳥や魚にキリストの言葉を教えたという。

しかし、こういう話は近頃滅多に聞かれなくなってしまった。豆や豆殻などは言うに及ばず、人間の言葉さえ分からない人が急激に増えてきた。わけても、政治家、企業経営者、役人、学者文化人など要路の人に「言語不感症」の人が増えてきたようだ。

カラスの鳴かない日はあっても、誰かがテレビカメラの前に並んで釈明文を読み上げた後で、やおら直立して深々と頭を下げる光景が放映されない日は無いくらいだ。何事かとよくよく聞いてみると、長いこと不満や不平がささやかれているのに気がつかず、事態を悪化させてしまったのだそうである。日頃から様々なものが発する密やかな声に傾聴したいものだ。